

# 大学体育における知識・能力の形成 (3)

— 生涯スポーツ実践に向けた実験的授業 —

水月 晃\*<sup>1</sup>・笠井妙美\*<sup>2</sup>・西田明史\*<sup>3</sup>・柿原一貴\*<sup>4</sup>・則元志郎

## The acquisition of knowledge and ability through the university physical education (3)

— An experimental study in class toward carrying out in practice lifelong sports —

Akira SUIGETSU, Taemi KASAI, Akihito NISHIDA, Kazutaka KAKIHARA, Shiro NORIMOTO

### I. 目的

大学入学時における大学生の保健体育教科に関する学習実態を調査した我々の先行研究<sup>1)</sup>によると、「体育理論」と「運動技能」に関する学習の理解度は2割から3割程度であった。つまり、高校までの体育授業における学習は、自己目的の動機に支えられた学習に重きが置かれ、「体育理論」と「運動技能」を関連づけた学習や「運動技能」の向上を図る学習は、割と軽視されている傾向にあったと考えられる。以上のことから、大学体育においては、「体育理論」に基づいた「運動技能」の学習を通じて、運動・スポーツの特性や価値に触れる体験を保障し、大学生が運動・スポーツに対して肯定的な感情を抱き、自己の適性や能力に応じた運動実践方法や運動技能の高め方を把握できるように教授する必要性が示唆された。

また、我々の先行研究<sup>2)</sup>によれば、「体力・健康」の知識および実践力に関しては、高校までの体育授業において学習者の意識に残るほどの学習がなされていたものの、それらが一般化されるほどの学習はなされていなかったと推察された。さらに、「生涯にわたって健康や体力を維持し、人間らしい価値ある生き方をしたいという願いのもとづくのが生涯スポーツである」とする森川<sup>3)</sup>の見解をもってすれば、大学体育においては、高校までの体育授業の学習内容を補完し、生涯にわたって運動・スポーツに携わっていくための動機づけと実践方法を教授する必要性が示唆された。

体育とは、大貫<sup>4)</sup>によると「運動文化(スポーツ)に関する基礎的教養を教える教科」、中村<sup>5)</sup>によると「運動文化の継承・発展に関する科学を教える教科」とされている。また、出原<sup>6)</sup>は、「体育という教科は…(中略)…人類の遺産としての運動文化を継承し、発展させるための学力を育てる教科である」と述べている。さらに森<sup>7)</sup>は、「教科とは、明確な教科目標を達成するために、社会的に承認された科学、文化、技術、芸術などから学校で学ぶべきものとしていくつかの領域に区分され、系統的に組織されたものである。…(中略)…各教科は、文化の継承と発展および人間形成という教育の基本的目的との関係を常に問われている。したがって、体育も運動文化の継承と発展を図りながら人間形成に寄与している」と述べている。つまり、体育とは、「運動文化という人類の遺産」を教え、伝えていく教科であると言える。

以上のことを踏まえ、大学体育では、生涯スポーツと関連づけるような教授内容と方法を検討する必要があると考えた。また、従来の「楽しい体育」路線からではなく、教科としての体育に着目し、「体育は何を教える教科であるか」という観点に基づくことも必要である。そこで本研究では、生涯スポーツに関する「体育理論」とバレーボールの「運動技能」を同時に修得できるような授業を行うことにより、生涯スポーツ実践に関する知識・能力がどのように形成されるのか検討することを目的とした。

\*1 熊本大学教育学部研究科 \*2 九州東海大学 \*3 中九州短期大学 \*4 東海大学

## II. 研究方法

## 1. 実験授業

## 1) 授業概要

期日：2009年4月15日～同年7月22日

場所：熊本県K大学体育館

対象：同大学に2009年度入学した大学生48名（男子28名，女子20名）

時間：90分×14回

指導者：教員歴25年 K教師

教材：バレーボール

単元：生涯スポーツに関する体育理論と運動技能の学習

## 2) 授業実践（概略）

| 時限                   | 技術学習の実践・概要   | 理論学習の実践・概要   |
|----------------------|--|--|
| 1                    | ガイダンス  | 目的：バレーボールの<br>現行ルール，審<br>判方法，用器具<br>の知識を学ぶ。                                |
| 2                    | 目的：ルール及び運動技能のレベルを確認する。<br>内容：基本的ルールを理解する。<br>：チーム及び自分のレベルを知る。<br>方法：正式ボール・コートで試しのゲームをする。   |  |
| 3<br>4               | 目的：基本技術，ボールに慣れ親しむ。<br>内容：サーブ，レシーブ，アタックの技術を高める。<br>：ラリーを継続させる。<br>方法：ビーチバレーボールを使用しボールに慣れる。<br>：バドミントンコート，ネット2mを使用する。<br>：2人組になり3点先取のラリーをする。3回タッチのアップダウンゲームをする。                          | 目的：ネット型ゲーム<br>の「共通のおも<br>しろさ」と「競<br>技別のおもしろ<br>さ」を学ぶ。<br>方法：レポートを提出<br>する。 |
| 5<br>6               | 目的：基本技術，攻撃と防御の技術を身につける。<br>内容：サーブ，レシーブ，パス，アタック，ブロックの技術を高める。<br>：役割分担を明確にする。<br>方法：ビーチバレーボールを使用する。<br>：バドミントンコート，ネット2mを使用する。<br>：3人組になり，3回タッチのうち必ず1回はボールに触れる。3点先取のアップダ<br>ウンゲームをする。     | 目的：運動するための<br>施設に関する情<br>報収集や利用方<br>法等を学ぶ。<br>方法：レポートを提出<br>する。            |
| 7<br>8               | 目的：基本技術，攻防一体の技術を身につける。<br>内容：サーブ，レシーブ，トス，スパイク，ブロックの技術を高める。<br>：コンビネーションプレーを意識する。<br>方法：ミニバレーボールを使用する。<br>：バドミントンコート，ネット2mを使用する。<br>：3人組になり，3回タッチのうち必ず1回はボールに触れる。3点先取のアップダ<br>ウンゲームをする。 | 目的：生涯スポーツの<br>選択，決定方法<br>を学ぶ。<br>方法：レポートを提出<br>する。                         |
| 9<br>10              | 目的：試合の中で組織的にラリーを継続できる技術を身につける。<br>内容：ラリーが継続できるように，正確なレシーブ，トスを意識する。<br>：バレーボールの醍醐味を体感する。<br>方法：ミニバレーボールを使用する。<br>：正式コート・ネットで6人制のゲームをする。   | 目的：生涯スポーツを<br>実践するための<br>原則を学ぶ。（金，<br>暇，場所）<br>方法：レポートを提出<br>する。           |
| 11<br>12<br>13<br>14 | 目的：試合の中で戦術を活かしたコンビネーションプレーができる技術を身につける。<br>内容：チームプレーの攻防を意識する。<br>：コンビネーションプレーの技術・戦術を高める。<br>方法：正式のバレーボールを使用する。<br>：正式コート・ネットで6人制のゲームをする。   |  |

最初は、少人数でビーチボールを使いバレーボール系種目の醍醐味、個々の役割を体感・理解する。また、バレーボールがうまくなる道筋を系統立て学習すると同時に生涯スポーツに関わる知識も修得し、最終的には6人制バレーの試合ができる能力を身につける。

2. 調査方法および集計・分析方法

調査は、質問紙調査による集合調査作法を用い、「運動・スポーツ活動に対する意識や活動の調査について」の15項目を事前調査が2009年4月中旬、事後調査が2009年7月中旬に実施した。また、運動技能の習熟度を分析するために事前・事後のゲームをビデオ録画した。また、集計に関しては、単純集計による比較検討、分析については、ビデオ分析を行った。

Ⅲ. 結果および考察

1. 体育理論について

1) バレーボールに関わる知識の理解・実践の程度

今回、バレーボールを生涯スポーツ実践のための教材として取り扱ったのは、バレーボールの特徴であるチームワーク、役割の分担と協力、責任感などを育てる効果にある。また、全身的な運動で、バランスのとれた体力づくりに役立ち、年齢や性別、あるいは体力の程度に応じてコート広さ、セット数、人数など変え老若男女で楽しむことができ、生涯スポーツ実践に適した教材であることがあげられる。

そこで、生涯スポーツとしてバレーボールを実践するための「知識の理解・実践の程度」として、①ネット型ゲームの「共通のおもしろさ」と「競技別のおもしろさ」、②バレーボールの現行ルール、審判方法、用器具、③バレーボールの大会企画、運営方法、④社会人バレーボールの組織、運営、試合、登録方法に関することを修得すべき「体育理論」として設定した。

その結果、図1に示す「説明できる」と回答した事前調査は、②33.3%、①16.7%、③14.6%、④6.3%の順番であった。事後調査においては、①86.0%、②72.1%、③39.5%、④34.9%の順であった。また、事前・事後を比較すると、①ネット型ゲームの「共通のおもしろさ」と「競技別のおもしろさ」を説明できると回答した69.3%の差が一番大きかった。

このことは、ネット型競技の「攻撃と防御がネット越しに分離されている」、「相手からのボール操作の妨害がない」、「身体的接触がない」ことの特徴を理解し、バレーボール競技独自の醍醐味である「3回までのタッチ」、「役割の分担と協力」、「戦術を立てやすい」などが実践できた結果ではないかと考えられる。逆に、③バレーボールの大会企画、運営方法、④社会人バレーボールの組織、運営、試合、登録方法に関することは、授業実践として具体化していなかったため、大きな伸びを示さなかったと思われる。このことから、実際に学習

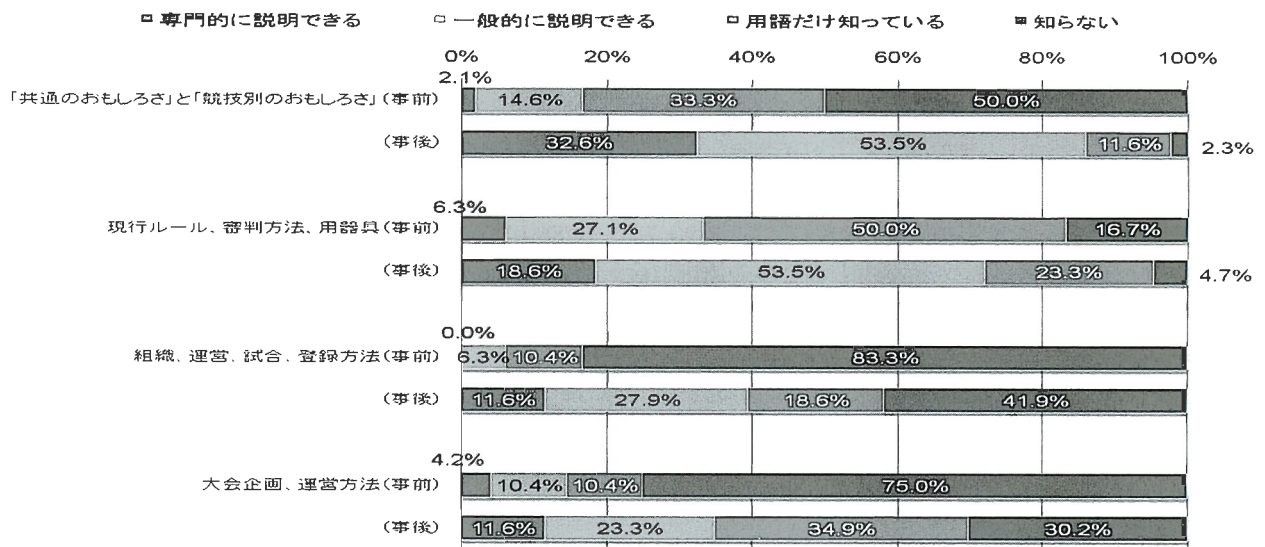


図1 バレーボールに関わる知識の理解・実践の程度

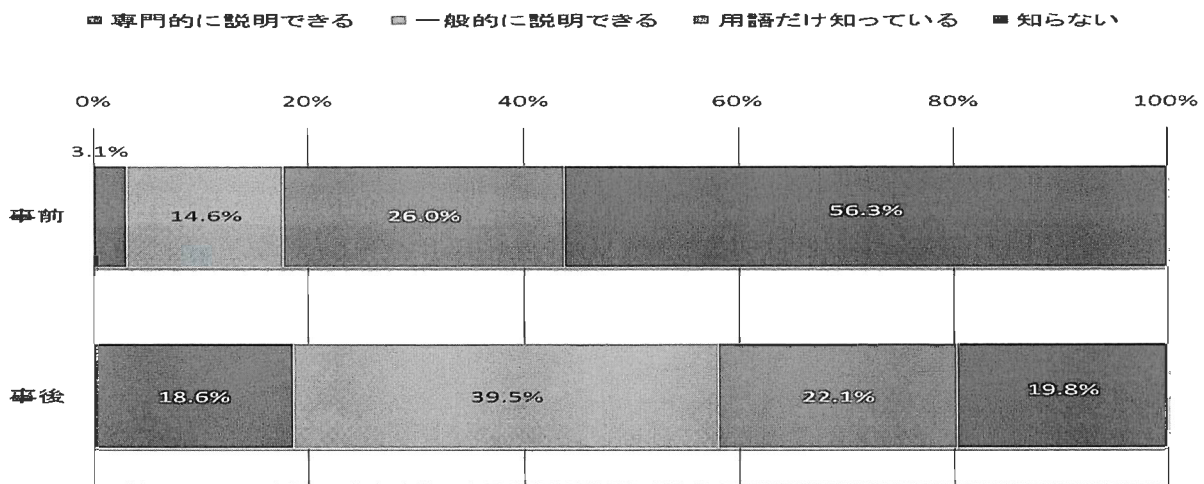


図2 バレーボールに関わる知識の理解・実践の程度（全体）

したこととしなかったことでは明確な差が出た。

また、図2に示す全体の結果としては、「説明できる」と回答した事前調査17.7%に対し、事後調査は58.1%と40.4%の伸びを示した。このことは、「運動技能」を通じ、より身近な体験の中から「体育理論」が身についたものと、そうでなかったものが入り混じり、平均した結果になったと推察される。

## 2) 生涯スポーツに関わる知識の理解・実践の程度

今日のスポーツは、「競争」を中心とした競技スポーツと、「楽しみ」や「健康」を目的とした大衆スポーツに二極分化できる。その中で、競技スポーツの価値は、ただ単に楽しみや身体とその健康に関することよりも「正義、勇気、公正、愛国心、団結心」などといった教育的主義的なものを重視している。また、大衆スポーツの価値は、「楽しみと健康」を目的とし、「楽しみ」のスポーツは勝敗にこだわることなく気楽で、健康で文化的な生活を与えてくれるものであり、生涯スポーツを考える上でのスポーツは、大衆スポーツとしての考えが基本となってくる。

そこで、生涯スポーツは、日常生活を行なうための運動や労働とは異なり、「楽しみ」「遊び」として行われることが重視され、スポーツそれ自体に積極的な価値を見出し、心身を活性化させ、その人にとっては「生き甲斐」にすらなるのが生涯スポーツであると森川<sup>8)</sup>は述べている。また、増田<sup>9)</sup>は、生涯スポーツの視点でスポーツをとらえようとする場合、スポーツの本質を理解することが必要である。スポーツは、もともと人間の遊び、レクリエーションであって、スポーツには7つの本質的な性格がある。そのため、何かひとつの側面のみが全面にでるのではなく、他の側面にも留意した意識が必要であり、それぞれの年齢や体力、志向の推移、人の環境や立場などによって多様な行われ方を示すことになる」と述べている。さらに、森川<sup>10)</sup>はスポーツを日常的に実践するには、スポーツ活動の土台にささえられて、国民すべての者がスポーツを享受することのできる客観的条件（金・暇・場所）をつくりだしていくことが必要であると述べている。

以上のことから、生涯スポーツに関わる知識の理解・実践の程度として、①生涯スポーツを実践するための原則（金・暇・場所）、②生涯スポーツの選択、決定方法、③運動施設の利用方法を修得すべき「体育理論」として設定した。その結果、図3に示す「説明できる」と回答した事前調査は、③29.2%、②8.3%、①8.3%の順番であった。事後調査においては、③90.7%、①86.0%、②81.4%であった。また、事前・事後を比較すると①生涯スポーツを実践するための原則（金、暇、場所）を「説明できる」と回答した77.7%の差が一番大きかった。このことは、今までに客観的条件である「金」「暇」「場所」がすべて用意されており、自分自身で獲得する必要がなかったため、知識として身につけていなかったと思われる。さらに、その延長では、競技スポーツを追い求め、大衆スポーツである「楽しみと健康」を目的とする機会を得てなかったことが②生涯スポーツの選択、決定方法の73.1%の伸びに示されたのではないかと考えられる。

また、図4に示す全体の結果としては、「説明できる」と回答した事前調査15.3%に対し、事後調査は86.1%と70.8%の伸びを示した。このことは、増田<sup>11)</sup>がいう、生涯スポーツの2つ意味である、「生涯にわたってスポーツや運動を継続して楽しむこと」、「どの年齢の人でもスポーツや運動に親しみ楽しむこと」を修得したのではないかと推察される。

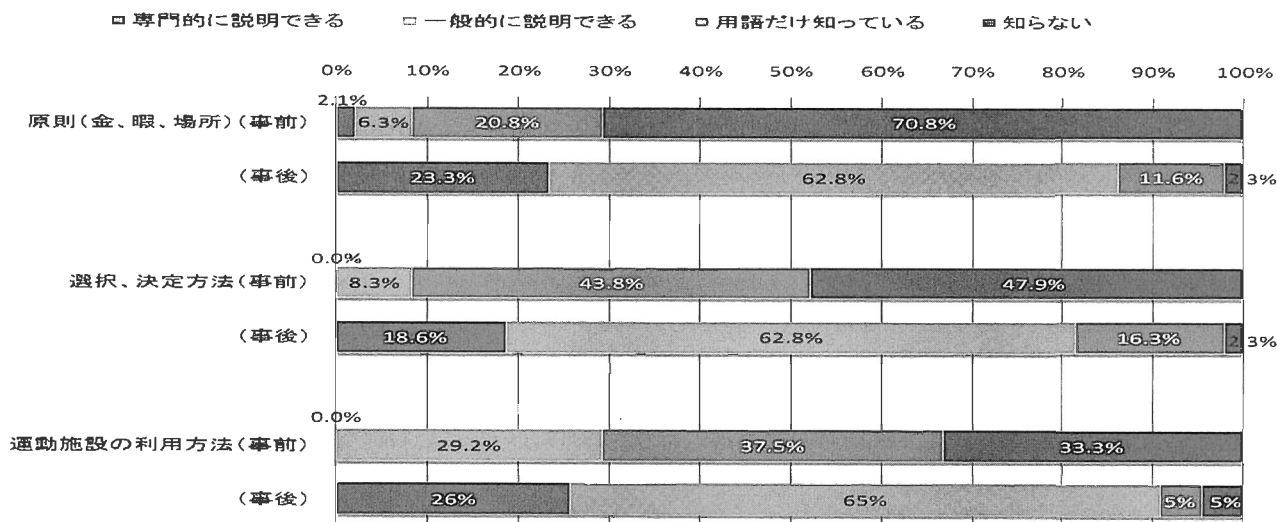


図3 生涯スポーツに関わる知識の理解・実践の程度

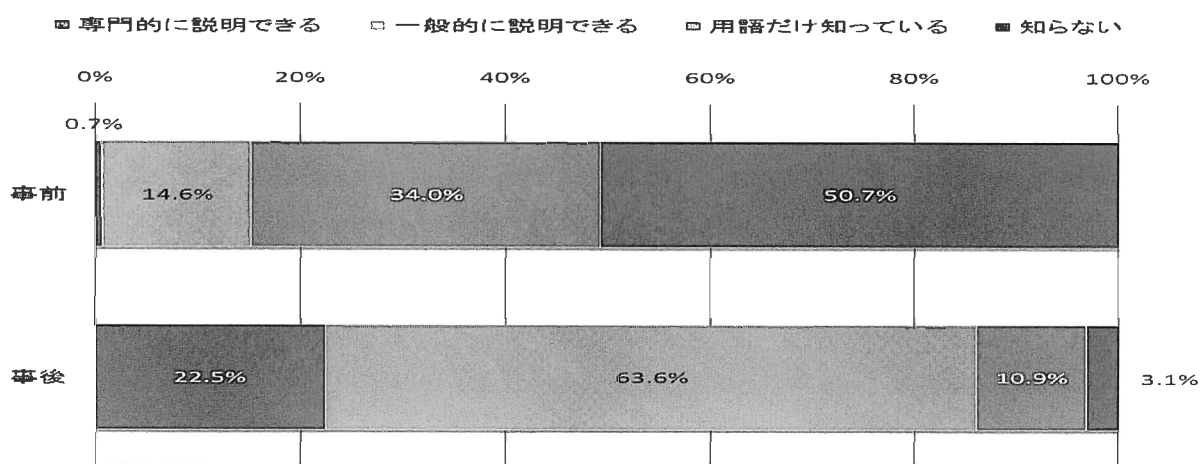


図4 生涯スポーツに関わる知識の理解・実践の程度 (全体)

## 2. 運動技能について

### 1) 運動技能の習熟度 (全体)

バレーボールの競技特性は、(1)「走る」「飛ぶ」「打つ」といった基本的な運動要素が要求される。(2) レシーブ、トス、スパイクの各技能が刻一刻の変化と状況に応じて適切に発揮されることが要求される。(3) ミスが直接ポイントとなるので、侵入型(ゴール型)球技種目とは異なり、相手のミスを誘うことがポイント獲得の大きな要因となる。(4) チームゲームであり、組織力を活かして、自分を上回る相手を打ち破ることができることである。また、バレーボールの技能を高めるには、三段攻撃の各ポジションの役割を理解すること、予測して次のプレーを判断できなければいけないことである。

さらに、眞砂野<sup>12)</sup>は、「手でボールを操作し、組み立てを工夫して、いかに相手コートにボールを落とすことができるか、いかに自分のコートにボールを落とさないことができるかという攻防の楽しさこそが特性である」と述べている。つまり、①いかにボールを(相手コートに)おとすか、②そのためにどのように組み立てるか、③いかにボールを(自陣コートに)落とさないかの3つの局面が大切な指導内容であり、学習内容であると述べている。

今回は、以上のことを踏まえ、最初は少人数でビーチボールを使いバレーボール系種目の醍醐味、個々の役割を体感・理解し、最終的には6人制バレーの試合ができる能力を身につけることができるように学習した。

その結果を図5に示すように、11項目の得点ポイントで集計した。太字矢印の左側を「自力得点」、右側を「自減得点」の2つに分類し、事前調査の「自力得点」は32.5%「自減得点」は67.5%であった。内容として

は、「自力得点」のサービスエース 10.5%，スパイク 7.9%，アタック（相手コートに返すだけ） 6.3%の順で多く、「自滅得点」はサーブミス 22.0%，その他ミス 20.9%，レシーブミス 14.1%の順であった。このことは、基本技術の未習熟、三段攻撃の各ポジションの役割や次のプレーを予測できていないなど、眞砂野がいう「3つの局面」を理解および実践できていない状況であった。しかし、バレーボールがうまくなる道筋を系統立てて学習し、森川<sup>13)</sup> がいう「スポーツの主人公」を育てることによって、事後調査の「自力得点」は 47.5%，「自滅得点」は 52.5%になった。内容としては、「自力得点」のスパイク 21.0%，ブロック 11.6%が増え、逆にサービスエース 7.1%，アタック（相手コートに返すだけ） 3.1%が減った。また、「自滅得点」はサーブミス 12.5%，その他ミス 17.4%，レシーブミス 13.4%が減った。

この結果を全体的にみると、「自力得点」の攻撃力は高まったもの 5 割を満たしていなかった。しかし、基本技術の向上、三段攻撃の各ポジションの役割や次のプレーを予測できたことなど、ラリーの応酬が続き、3つの局面の理解および技術の向上が図れたと推察される。また、バレーボールの醍醐味を自ら体感でき、生涯スポーツを実践する上での自信および動機づけになったのではないかと思われる。

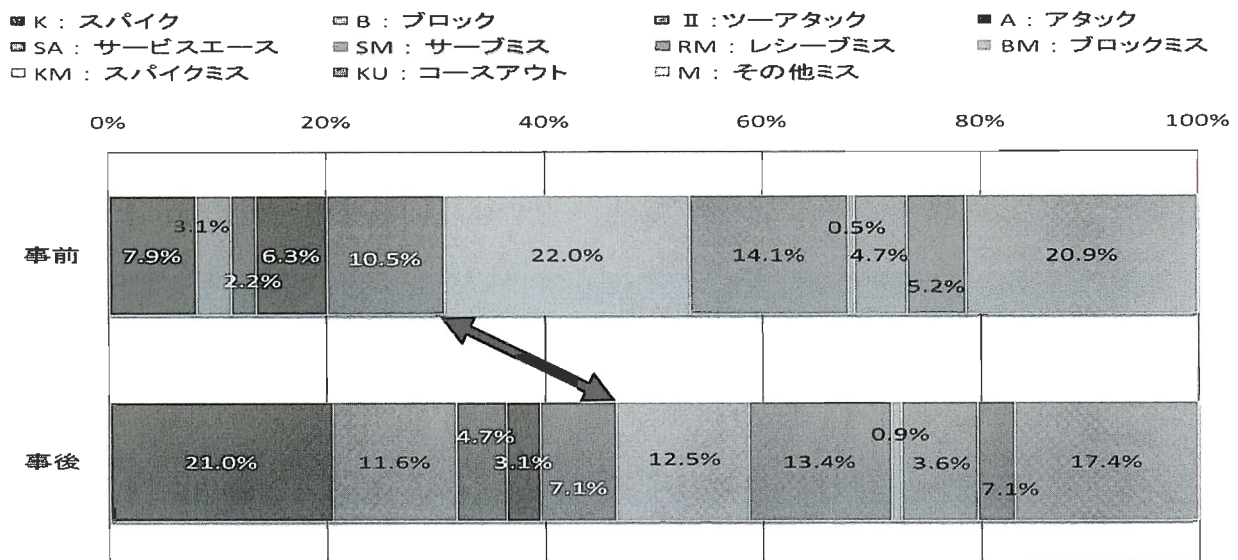


図 5 運動技能の習熟度

2) 運動技能の習熟度（男女比較）

運動技能の習熟度（男女比較）の結果を図 6 に示した。男子の事前調査における「自力得点」は 37.0%，「自滅得点」は 63.0%であった。内容としては、「自力得点」のスパイク 15.0%，サービスエース 9.0%，ブロック 6.0%の順で多く、「自滅得点」はサーブミス 20.0%，レシーブミス・その他ミス 15.0%の順であった。また、女子の事前調査における「自力得点」は 22.0%，「自滅得点」は 78.0%であった。内容としては、「自力得点」のアタック（相手コートに返すだけ） 12.1%，ツーアタック 8.8%の順で多く、「自滅得点」はその他ミス 27.5%，レシーブミス 24.2%，サーブミス 13.2%の順であった。このことから、男女ともに「自滅得点」の割合は高かったが、「自力得点」に関するスパイクやブロックの技術の差は歴然としていた。

次に、男子の事後調査における「自力得点」は 46.4%，「自滅得点」は 53.6%であった。内容としては、「自力得点」のスパイク 17.5%，ブロック 15.8%，サービスエース 7.0%の順で多く、「自滅得点」はその他ミス 17.5%，サーブミス 12.3%，レシーブミス 11.4%の順であった。また、女子の事後調査における「自力得点」は 48.2%，「自滅得点」は 51.8%であった。内容としては、「自力得点」のスパイク 24.5%，ブロック・サービスエース 7.3%の順で多く、「自滅得点」はその他ミス 17.6%，サーブミス 12.7%の順で減り、逆にレシーブミス 15.5%が増えた。このことは、相手チームのサーブ技術が向上したことによりレシーブミスが増加したと考えられる。

この結果を全体的にみると、男女ともに「自力得点」は 5 割を満たしていなかったが、男子はレシーブ、トス、スパイクの各技能が刻一刻の変化と状況に応じて適切に発揮され、組織的にスパイク、ブロックが多用されていた。また、女子も男子と同じく技術の向上を図ることができ、特にスパイク、ブロックにおける伸び率は高

かった。以上のことから、バレーボールがうまくなる道筋を系統立て学習したら「運動技能」が確実に高まると推察される。

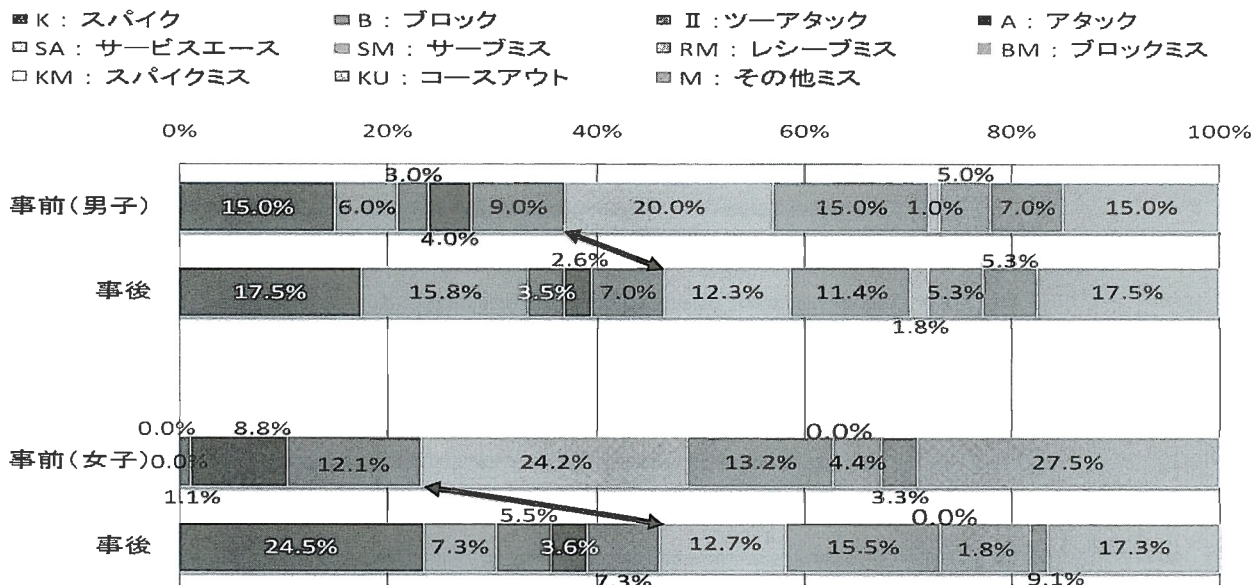


図6 運動技能の習熟度 (男女比較)

### 3. 生涯スポーツに関わる必要性の理解度について

生涯スポーツを実践するための基本的条件として、①金、②暇、③施設・設備の利用方法(場所)、④仲間、⑤基本技術、⑥おもしろさ、⑦ルール、審判方法、道具の役割の7項目を設定し、「体育理論」に関する内容を①②③④、「運動技能」に関する内容を⑤⑥⑦の2つに分類した。また、各項目の設定内容として、スポーツを実践するために必要な客観的条件(金、暇、場所)および生涯スポーツに関わる人(仲間)、運動・スポーツを楽しむための「最低限度の技術」、「独自のおもしろさ(醍醐味)」、「試合をするためのルール、審判方法、道具の役割」とした。

今回は「運動技能」を通じ「体育理論」を修得すると、生涯スポーツに関わる必要性をどれだけ感じることができるのか調査した。その結果、図6に示す「あてはまる(必要である)」と回答した事前調査は、⑤⑦95.8%、③⑥93.8%、④85.4%、②77.1%①33.3%の順番であった。事後調査においては、③95.3%、⑤93.0%、②88.4%、⑥86.0%、④⑦83.7%、①72.1%の順であった。また、事前・事後を比較すると①金が「あてはまる(必要である)」と回答した38.8%の差が一番大きく、このことは、「金」をかけなくても学生は用具・場所などが必然とあり、体育授業などにおいても体を動かす機会が保障されている。そのため、事前調査においての必要性をあまり感じていなかったが、「運動理論」を修得したことによって必要性の理解がなされ、事後調査の数値が伸びたのではないかと考えられる。また、その逆で、事後調査において「あてはまる(必要である)」が減少した⑤基本技術、⑥おもしろさ、⑦ルール、審判方法、道具の役割については、「運動技能」を修得したことによって達成感が満たされ、わかってはいるものの必要性の理解が希薄になったのではないかと考えられる。

生涯スポーツに関わる必要性の理解度(全体)をみると、「あてはまる(必要である)」と回答した事前調査82.2%に対し、事後調査は86.1%と8割以上の高い数値で推移した。しかし、項目ごとに見てみると「あてはまる(必要である)」と理解していても、「非常にあてはまる(絶対に必要である)」との認識は42.9%(事後)と全体からして低かった。このことは、「体育理論」と「運動技能」の必要性の理解は必ずしも一致しなかったと推察される。

### 4. 運動・スポーツ活動の実態と実践(意識)の程度について

生涯スポーツを実践するための足掛かりとなる、体育授業以外の運動・スポーツ活動についての実態と実践(意識)の程度を①「活動していない、継続して将来はしたい」、②「活動しているが、将来も継続したい」、③

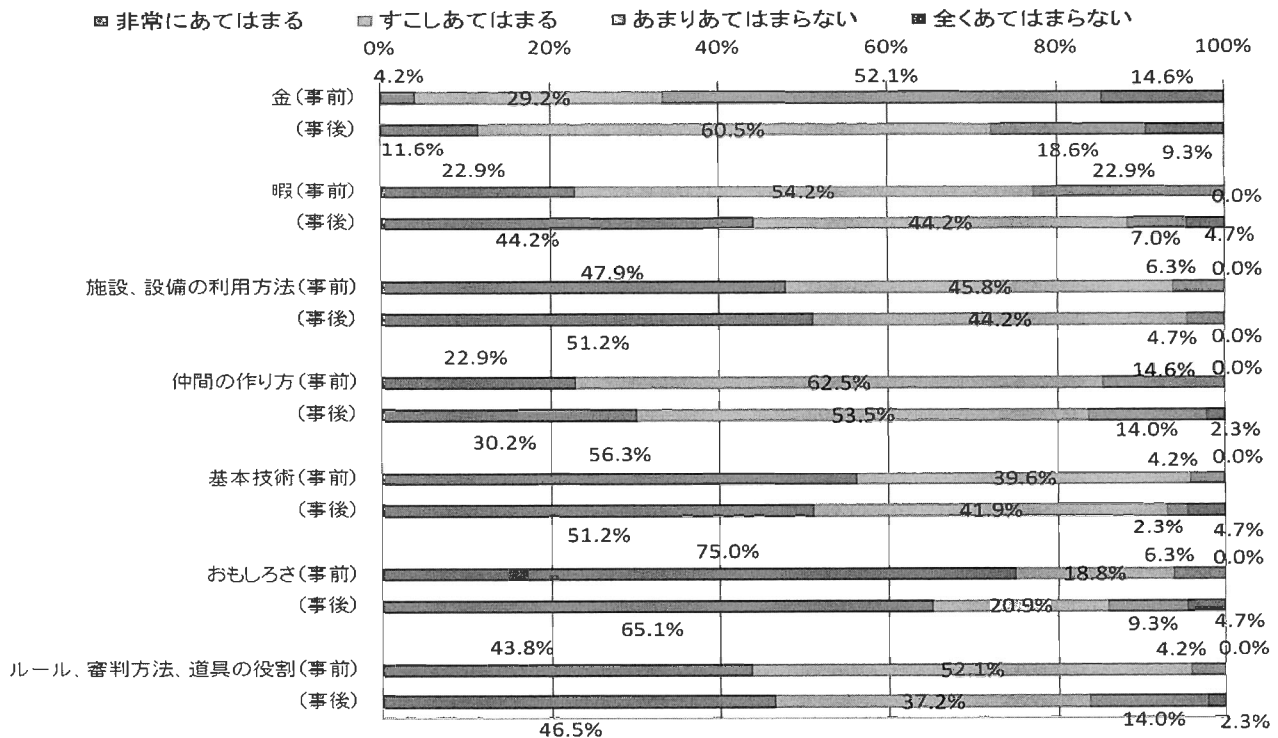


図7 生涯スポーツに関わる必要性の理解度

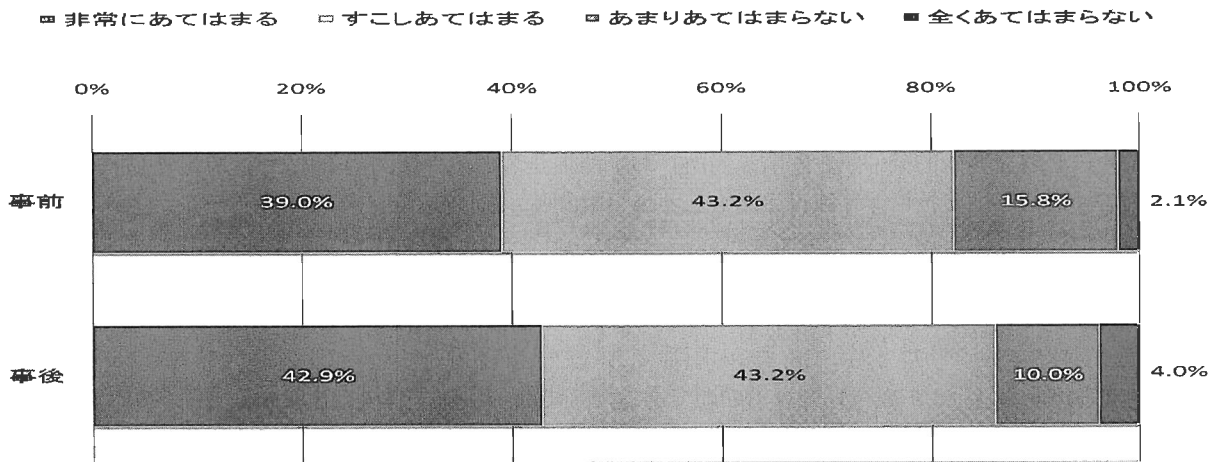


図8 生涯スポーツに関わる必要性の理解度 (全体)

「活動していない、在学中はしたい」、④「活動しているが在学中したい」、⑤「活動していない、これからもしない」、⑥「活動しているが、これからはしない」の6項目に分類し、体育授業以外での定期的な活動（少なくとも週3回以上、1回につき20分以上）の実態を調べた。

その中で、「運動技能」を通じ「体育理論」を修得したら、生涯スポーツの実践に対する意識がどのように変化するかを調査した。その結果を図8に示す①②の「将来する」、③④の「在学中はする」、⑤⑥の「しない」の3つに分類し、事前調査においては「将来する」50.0%、「在学中はする」41.7%、「しない」8.3%の順番であった。事後調査においては、「将来する」65.1%、「在学中はする」32.6%、「しない」2.3%の順であった。また、事前・事後を項目ごとに比較すると②「活動しているが、将来も継続したい」と回答した28.7%の差が一番大きかった。

今後は、木下<sup>14)</sup>が「生涯スポーツは、伝統的にやってきたスポーツ種目や大切にしてきた価値観を絶対にするのではなく、社会の志向性と価値の変化に対応して、そのスポーツ実践がいかなる満足やよろこびをもたらす



かという側面を大切に、それを少しでも価値ある体験及び実践に発展できるかが重要である」と述べているように、学習したことが生活の中で意味を持ち、健康をもたらす生活行動として具現化し継続して実践できなければいけないと考えられる。

このことから、体育授業を通じ知識・能力が形成されると、運動・スポーツに対する姿勢および意識が大きく変化すると推察される。

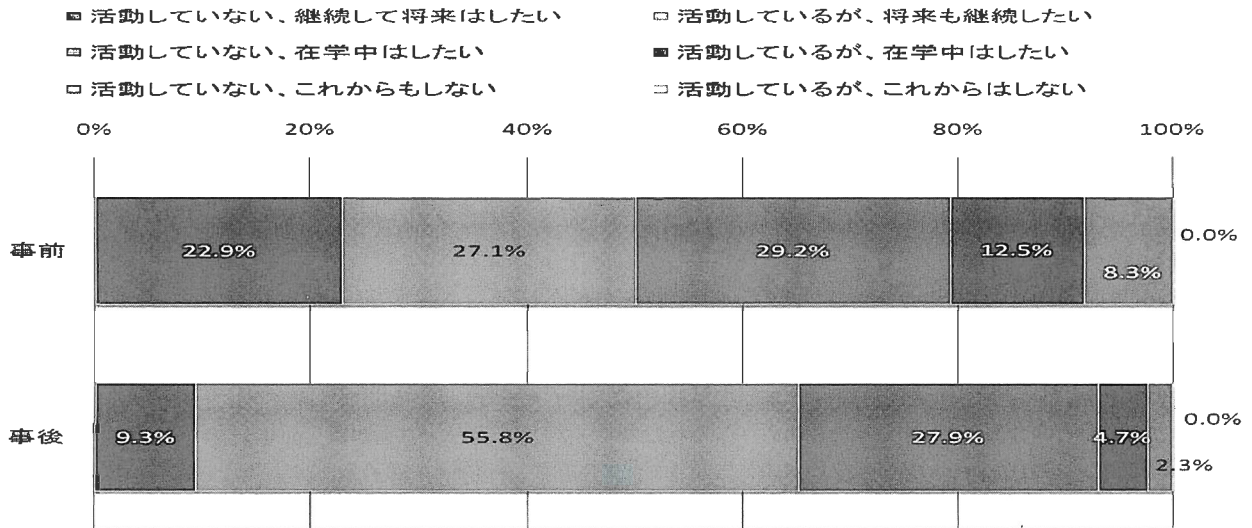


図9 運動・スポーツ活動の実態と実践（意識）の程度

#### IV. 結論

##### 1. 体育理論について

- 1) バレーボールに関わる知識を学習したことにより、ネット型ゲームの「共通のおもしろさ」と「競技別のおもしろさ」を修得し、バレーボールを生涯スポーツとして実践する知識を得ることができた。
- 2) 生涯スポーツに関わる知識を学習したことにより、「生涯にわたってスポーツや運動を継続して楽しむこと」、「どの年齢の人でもスポーツや運動に親しみ楽しむこと」の意味を理解することができた。また、生涯スポーツ実践するための選択・決定方法、客観的条件（金、暇、場所）の知識を得ることができた。

##### 2. 運動技能について

- 1) 約8割がバレーボール部活未経験者であったが、バレーボールがうまくなる道筋を系統立て学習したことにより、バレーボールの競技特性や醍醐味などを理解し体感することができた。
- 2) 生涯スポーツとして実践できる基本的技術を身につけ、三段攻撃の各ポジションの役割や次のプレーを予測する組織的プレーを展開することができた。

##### 3. 生涯スポーツに関わる必要性の理解度について

- 1) 生涯スポーツに関わる必要性の理解度として、事前から事後にかけ理解は深まったと考えられるが、基本的項目の「体育理論」と「運動技能」の必要性の理解は必ずしも一致しなかった。

##### 4. 運動・スポーツ活動の実態と実践（意識）の程度について

- 1) 体育授業を通じ知識・能力が形成されると、運動・スポーツに対する取組みや意識が大きく変化し、生涯スポーツを実践するための動機づけに効果があった。

## 引用文献

- 1) 則元志郎, 西田明史, 水月晃, 柿原一貴, 笠井妙美, 田中靖久 (2009)「大学体育における知識・能力の形成 (1) 一大学入学時における保健体育教科の知識・実践力の実態と大学体育の課題」『熊本大学教育学部紀要』, 第58号, p.29
- 2) 前掲書 1) p.28
- 3) 森川貞夫 (1987)「わたしたちの体育・スポーツ」共栄出版, p.13
- 4) 大貫耕一 (2001)「「スポーツを教える授業」から「スポーツで教える授業」へ」『たのしい体育・スポーツ』10月号, p.18
- 5) 中村敏雄 (1999)「学校体育は何を教える教科であるか」『戦後体育実践論 資料編』創文企画, p.165
- 6) 出原泰明 (2004)「体育は他教科とは何が違うのか—論じ方をめぐるいくつかの視点—」『体育科教育』3月号, 大修館書店, p.16
- 7) 森知高 (2002)「教科としての体育」『体育科教育学入門』大修館書店, p.12
- 8) 前掲書 7) pp.7-18
- 9) 増田靖弘 (1997)「生涯スポーツのプログラム」遊戯社, pp.12-13
- 10) 前掲書 7) pp.21-22
- 11) 前掲書 9) p.16
- 12) 眞砂野裕 (2009)「目からウロコ!「局面学習」の実践」『体育科教育』大修館書店, pp.48-51
- 13) 森川貞夫 (1985)「生涯スポーツのすすめ—みんなのスポーツの社会学—」共栄出版, pp.4-5
- 14) 木下廣之 (1993)「新しいスポーツの台頭と生涯スポーツ指導者」『指導者のためのスポーツジャーナル』6月号, 財団法人日本体育協会, p.1